

甲塚古墳特集

甲塚古墳出土土遺物重要文化財指定

甲塚古墳とは

6世紀後半ごろ造られた、全長80mの墳丘をもつ、帆立貝形前方後円墳です。北側に隣接して下野国分寺跡が所在します。

地元で甲塚古墳は、国分寺復興の財宝とそれを守った僧兵の甲冑と一緒に埋まっていたという伝承があり、甲塚古墳の名称がついたといわれています。

歴史資料からみる

この古墳は古くから書物等に記載があり、江戸時代の寛政年間（1799-1817）に描かれた『日光道中壬生通分間延絵図』には下野国分寺跡の南西部に字兜塚と記されている箇所が、甲塚古墳になります。この絵図には下野国分寺は、国分寺焼失跡と描かれています。書物の初見は、地元教師で郷土史家が大正13年に刊行した「國分寺の史蹟」であり「甲塚、国分寺史蹟の西南端にあり。高さ三間、径五間南方は低く方形なり、発掘せり石棺

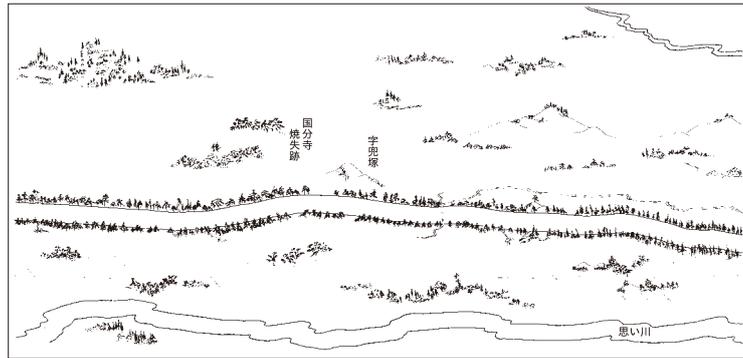


図1 江戸時代の甲塚古墳周辺絵図 『日光道中壬生通分間延絵図』を1部改編

ありき」と記されています。その後の記録には明治16年に後円部を同26年に主体部を掘ったことが書かれています。現在は、この時おこなわれた発掘により後円部が十文字に分断された状態です。

古墳の特徴

下野市周辺地区の6世紀後半以降に築造される古墳は、次の共通する3つの特徴を持つようになります。

- ①墳丘の第1段目が低平で幅が広い（「基壇」（きだん）と呼ばれる）。
- ②前方部に横穴式石室がある。
- ③石室には、凝灰岩の切石を用いている。

こうした特徴をもつ古墳は「下野型古墳」と言われており、甲塚古墳もその一つになります。

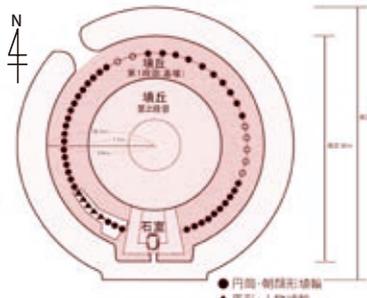


図2 甲塚古墳模式図

発掘調査から

発掘調査は、整備を実施した下野国分寺跡と一体的な整備・活用を図るため、平成16年度に実施しました。

墳丘が明治時代の調査で破壊されていることから、下野

型古墳の特徴でもある墳丘第1段目になる平坦面の調査を主に実施しました。

出土遺物とその配置

墳丘第1段目外縁と墳丘第2段目裾部の間には約14m幅の平坦面（基壇面）があり、平坦面の中央部付近に円筒埴輪列が1列に円形に廻る状況がわかりました。この埴輪列は、平坦面上を溝状に掘り基底部を据え付けた状況が確認されました。この埴輪列の中で図2で示してあるように西側くびれ部付近の▲で示した範囲から馬や人物の形をした形象埴輪が出土しました。図3で細い筒状のもので、立っているものや、横になっているものが馬形埴輪の足になり



図3 馬形埴輪出土状況

ます。出土した時に馬形埴輪は、足が4本立っており、口先や鼻の破片が足周辺から出土していたので、馬形埴輪ということがわかりました。



図4 埴輪列と土器群出土状況